日本聾啞教育史の新たな地平と非近代主義

_____アクターネットワーク論と存在様態論による_____

徳川時代の啞と仕形の再解釈

末森 明夫*

本稿はアクターネットワーク論および存在様態論を基盤とする非近代主義を援用し、徳川時代より大正時代に至る史料にみる日本聾啞教育言説の変遷の追跡を通して、明治時代における日本聾啞教育制度の欧米化という事象を相対化し、徳川時代と明治時代の間における日本聾啞教育言説の連続性を前景化し、日本聾啞教育史に新たな地平を築くことを眼目とした。具体的には、徳川時代の史料にみる啞ないし仕形（＝手話）に関連する記述を分析し、啞の周囲に配置された啞教育に携わる人たち（＝人間的要素）や庶民教化政策、手習塾、徒弟制度（＝非人間的要素）が異種混淆的に関係性を構築し、啞が諸要素との関係性の下に実在化していく様相を明らかにした。また、仕形を啞の周囲に配置された人間的要素および非人間的要素の動態の関係性として把握し、聾文化論にみる「聞こえない身体」と「手話を使う身体」の不可分的関係性は、「聞こえない身体」と「手話を使う身体」の関係性が一時的に一義の関係性を伴う仲介項に変化し外在化（＝純化）したものであることを明らかにした。さらに、徳川時代の日本社会において、啞や仕形をはじめとする諸要素の関係性が変化し続け、明治時代を経て現在の聾文化論が内包する諸問題にもつながっていることを明らかにし、非近代主義に則った日本聾啞教育史の再布置をはかった。

キーワード：日本聾啞教育史、非近代主義、アクターネットワーク論

1 はじめに

1.1 明治時代における日本聾啞教育制度の欧米化は近代化を意味するのか

現在の日本における聴覚障害児教育は、日本語とは異なる独自の文法をもつ日本手話を聴覚障害児の第一言語と位置づける手話教育の復権がみられる一方、聾学校生徒数の減少、人工内耳装着児の増加、地域校で学ぶ聴覚障害児のための情報保障制度の未整備など、問題が複雑化している。このような課題に臨み、日本における聴覚障害児教育の将来像を構築するためには、日本における聴覚障害児教育の変遷（以下、日本聾啞教育史）を再検証し、新たな地平を提示することが望まれる。

* 国立研究開発法人産業技術総合研究所 suemori.akio@aist.go.jp

従来の日本聾啞教育史は明治時代より昭和時代までの日本聾啞教育言説にみる聾啞観・手話観の連続性ないし非連続性に関する研究の蓄積がはかられてきた（中野・加藤 1967; 伊藤 1998; 津名 2005; 平田・橋本 2007）。しかし、明治時代以降に刊行された『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』（浅岡編 1892）や『庶民教育史』（乙竹 1929）には、「徳川時代¹⁾後期の手習塾には相当数の聾啞児がいた」という調査結果が載録されているにも拘わらず、徳川時代と明治時代の聾啞観・手話観の間における連続性ないし非連続性を社会学ないし教育史的視座に則り検証した例は皆無に近い。このような閉塞的状况を変えていくためには、新たな史料のみならず既知の史料をも再検証し、徳川時代以前の日本聾啞教育言説がどのようなものであり、明治時代の聾啞教育言説にどのような影響を及ぼしたのかを分析することが望まれる。

このような状況は「徳川時代以前の日本では啞者は人間とはみなされず、非人として社会の外部に位置づけられてきた。明治時代に欧米の近代的聾啞教育制度が導入され、日本の聾啞教育が本格的に始まった」という通説の影響によるものであることは否めない。ただ、日本聾啞教育言説に関する徳川時代以前の史料が少ないことも原因の一つにあげられる。実際、『近世障害者関係史料集成』（生瀬編 1996）には障害者に関する徳川時代の史料が約 900 件載録されているにも拘わらず、聾啞者や手話に関する史料は 11 件のみにとどまっている（高橋 2018）。もっとも、近年は徳川時代以前の史料の発掘が相次いでおり、日本聾啞教育史の文化資源環境も変わりつつある。

1.2 「聞こえない身体」と「手話を使う身体」は不可分的関係にあるのか

明治時代にみる欧米聾啞教育言説の受容という視座に立つと、昭和時代後葉の日本聾共同体にみる欧米聾文化論の受容という事象も分析の対象になり得るものと考えられる。20 世紀中葉より欧米では手話を第一言語とする聴覚障害者を「聾者」と位置づけ、少数言語民族に擬する聾文化論が勃興し（Ladd 2002）、日本における手話教育の復権にも大きな影響を及ぼした（木村・市田 1995）。しかし、聾文化論は「聞こえない身体」という概念と「手話を使う身体」という概念の不可分的関係を前提とする戦略的本質主義を内包しているため、「聞こえない身体」に基づく諸要素（慣習や言語など）が「手話を使う身体」に還元され、聾共同体や聾者個人のさまざまな差異が後景化してしまうことにより、聾文化の特性が画一化され、排除の論理が支配的になってしまうという本質的な矛盾を抱えていた（山下 2015: 178）。さらに日本聾共同体でも、日本語とは異なる文法をもつ「日本手話」と日本語の文法に沿って手話語彙を表出する「日本語対応手話」の対立、日本手話を第一言語とする「聾者」と、青年期以降に日本語対応手話ないし日本手話を習得した「後期手話習得聴覚障害者」の対立、「後期手話習得聴覚障害者」における自我の問題などが目立つようになった。そのような状況を踏まえ、20 世紀後葉より欧米では聾文化論の脱構築および再構築をはかる動きがみられるようになった²⁾。しかし、

欧米聾文化論は本質的には音声言語や表音文字に対する対抗文化が投影されたものであり、漢字文化圏に属する日本聾共同体に無謬的に受容され得るかどうかは検討の余地が残るものと考えられる（山下 2015: 181）。

一方、昭和時代初葉以前の史料を繙くと、現在の「中途失聴者」ないし「難聴者」に該当する者は〈聾〉、日本手話を第一言語とする「聾者」に該当する者は〈啞〉と呼ばれており、〈聾〉は「聞こえない身体」を含意するものの、「手話を使う身体」を含意する語ではなかったことが窺われる（末森・高橋 2016）³⁾。また、〈啞〉は「手話を使う身体」を含意するだけでなく、聞こえるにも拘わらず声を出すことができない者や吃音者をも含意する語であり、必ずしも「聞こえない身体」を含意する語ではなかったことが窺われる。すなわち、昭和時代初葉以前は〈聾〉と〈啞〉は必ずしも不可分の関係を前提とする語彙ではなかったのである。また、明治時代より昭和時代中葉まで用いられていた「手真似」や「手話」という語彙は明治時代初葉より使われ始めたものに過ぎず（伊藤ほか 2019）、徳川時代は〈仕形〉ないし〈仕方〉という語彙が用いられていた（末森・高橋 2016）。したがって、本稿では 20 世紀中葉以前の史料にみられる聾啞語彙や手話関連語彙を引用するときは、〈聾〉、〈啞〉ないし〈仕形〉という表記を用い、20 世紀中葉以降の資料にみられる聾啞関連語彙や手話関連語彙とは区別することにする。このような知見をふまえ、徳川時代より昭和時代にかけての〈聾〉観、〈啞〉観ないし〈仕形〉観の変容を俯瞰することにより、「聞こえない身体」と「手話を使う身体」の関係性がどのように変化し、それが日本聾啞教育言説の変遷の中にどのように位置づけられるのかを分析することが望まれる。

1.3 日本聾啞教育史の再検証におけるアクターネットワーク論および存在状態論の援用⁴⁾

M. Callon (1986)、J. Law (1994) や B. Latour (2005) による議論を経て発展してきたアクターネットワーク論は、観察者の世界に内在する要素を人間的要素ないし非人間的要素に還元せず、さまざまな要素の相互作用により形成され（＝媒介項）、主体と客体の両要素を内包する存在（＝準客体）として位置づけるとともに、媒介項間の作用可能性（青山 2012）や関係性における非対称性をも前提としない接近法である（三上 2019）。また、さまざまな媒介項が異種混淆的關係性（＝アクターネットワーク）を構築し、媒介項の關係性に関する特性や作用可能性が変化する（＝翻訳）中、多義的關係性をもつ媒介項の一部が一義的關係性をもつ仲介項⁵⁾に変化し、主体性や客体性を伴う知識ないし実践として観察者の世界から外在化される過程を追跡する接近法でもある（栗原 2018）。

実際、聴覚障害児教育の考察にアクターネットワーク論の援用をはかったものも増えており、T. P. Horejes and C. J. Heuer (2013) や F. K. Campbell (2017) は聾児、人工内耳装着児や後期手話習得聴覚障害者の自我形成に影響を与え得る要素を人間関係や意思疎通手段に限定せず、補聴器や人工内耳をはじめとする聴覚障害者

支援システムのような非人間的要素にも広げて包括的に論じている。このような研究は聾児や後期手話習得聴覚障害者の自我形成の問題にあたり、人間的要素の優位性を前提とせず人間的要素と非人間的要素を異種混濁的な関係性の中に対等に位置づけることにより、新たな知見を得ようとするものである。すなわち、徳川時代には人間とみなされず、非人間的要素の色合いが濃かった〈哑〉と〈哑〉教育に携わった人たちがどのような関係性を構築したのかを検証するにあたり、人間的要素と非人間的要素の「還元性」および「関係性の非対称性」を前提としないアクターネットワーク論は格好の理論でもある。

さらに、Latour (2012=2013: 17) は「アクターネットワーク論では観察者がさまざまな媒介項の間における関係性（＝存在様態）が帯びる価値を十分に把握することができない」という批判に対し、「存在様態⁶⁾自体が自身の構築過程に応じて存在様態の価値基準や適切性条件を産出している」とみなす存在様態論を提唱し (Maniglier 2012=2016)、「言語は言語的要素と非言語的要素の関係性を含む『虚構』という存在様態として捉えられる」と論じた (Latour 2012=2013: 238)。「手話を使う身体」がどのようにして「聞こえない身体」と不可分の関係性を構築し、手話を「聾者」の表徴とする戦略の本質主義⁷⁾に基づく価値観を備えるようになったのかを批判的に考証するにあたり、存在様態論に基づく言語観は十分に援用し得るものと考えられる。

一方、Latour (1991=1993: 130) はアクターネットワーク論より派生した非近代主義を次のように述べている⁸⁾：(1)「私たち人間の認識とは無関係にこの世界に存在するものがあり、科学はそれを捉える最良の手段だ」とする近代主義を否定し、(2)「私たち人間が認識できないものはこの世界に存在せず、私たちが世界を認識する仕方は社会や文化に規定される」とする脱近代主義をも否定し、(3)「世界に外在する知識を世界に内在する関係性の一時的な外観上の効果として捉え、表向きの近代的な純化と水面下の非近代的な異種混濁の翻訳それぞれの働きを認め、両者を包括的に捉える」ことが重要であり、「『私たちに遠く先行する存在様態』と『私たち人間の実践と関係することでこの世界に存在するようになる存在様態』が交わるなかで人間の認識や解釈が形成され、社会や文化は人間の専有物ではない」とする非近代主義が形成される。非近代主義は汎構築主義とも称され、脱近代主義における構築主義と区別される (久保 2019: 223)。

本稿ではアクターネットワーク論および存在様態論を援用して、〈哑〉が人間的要素や非人間的要素とさまざまな関係性を構築することにより、日本聾哑教育言説における〈哑〉観や〈仕形〉観がどのように変容してきたのかを追跡し、日本聾哑教育史の新たな地図を作成することをはかる。

2 〈唾〉とアクターネットワーク論

2.1 〈唾〉と芸能

徳川時代前期の狂言台本虎明本所収『三人片輪』（1642年）には〈唾〉に関する記述がみられる（藤本 1935）。

身共は口のきかぬものじゃと云程に、おしになってきたれば、亭主が芸能を訪ねた程に仕形をしてみせたれば……（本稿執筆時訳：有徳者が障害のある貧しい者に施しを与えようというので、唾のふりをして有徳者のところへ行ったら、有徳者が「何か見世物を演じることはできるか」と訊いてきたので、仕形を見せたところ……）

『三人片輪』（1642年）大蔵虎明能狂言集（大塚編 2006）

古代より芸能に係わる者は非人として当時の社会底辺層に位置づけられており（吉野 2016）、〈唾〉も芸能に係わる非人として位置づけられていたことが窺われる。徳川時代前期後葉に刊行された類書『和漢三才図会』（1712年）にも唾乞食の挿絵が描かれており（伊藤 1940）、当時の社会底辺層における〈唾〉の存在が窺われる。

2.2 〈唾〉と家庭

徳川時代前期にも貝原益軒や山鹿素行のように障害者救済を説いた儒学者がおり（生瀬 1986）、障害児を抱えた家庭にも儒学の影響が多少なりともあったことが窺われる。一方、徳川時代前期後葉の浄瑠璃『三莊太夫五人娘』（1727年）には〈唾〉が登場し、芸能に係わる〈唾〉や唾乞食とはまた異なる様相を窺うことができる。

アノおよつが唾聲、（中略）およつはおさんが膝を突き、仕形で知らすが言葉の代、人さし指を一つ出し、高々指を次に見せ、親指をびこつかし、我身をおしえ、傍なる扇を取上げて、ひらりひらりとひらめかす。（中略）今の身振が通じたそうな、此方はつんと合点がいかな、おさん手次に講釈頼む。ハテ今いわんした通、親仁様やおよつが達者で目出度いという仕形、親指は親、四つはおよつ、手をふったは達者な体、目を出したは目出度でござんぬかいのと言ひければ、お次は唾の顔打守り、人の言うこと我言うこと、（中略）親仁様の差図には唾聲に手習さする仕様がある、此扇という字を教えようならば、扇という字を書いて見せ扇を傍らに置き、其字をひった習わすれば、自然と扇という字を覚ゆる…

初代竹田出雲、1727年初演、『三莊太夫五人娘』（乙竹 1929）

伊藤政雄（1998: 133）は上記史料より「当時聾啞者に対してそうした教育が民間で私的に行われていたということの証とも言えるでしょう」と述べている。ただし、上記史料からは〈啞〉教育が富裕階級に属する家庭でおこなわれていたものにすぎないのか、あるいは徳川時代前期後葉にはすでに手習塾をはじめとする民間教育の場で〈啞〉教育がおこなわれていたのかを判断することはできないようにも見受けられる。さらに、〈啞〉教育の可能性がどのように認識され、〈啞〉教育がどのような動機づけの下におこなわれたのかという当時の〈啞〉と社会における諸要素との関係づけを見出すことはできないものとも考えられる。

2.3 〈啞〉と各安生理

徳川時代前期には儒学の日本的受容が進み（小玉 2014）、儒学を基盤とする仁政政策の萌芽がみられるようになった（小川 2007）。徳川時代後期前葉には庶民教導政策が本格化し（川平 2017）、六諭（孝順父母、尊敬長上、和睦郷里、教訓子孫、各安生理、毋為非為）の啓発を目的とする『六諭衍義大意』の手習塾への敷衍がはかられるようになった（松岡 2009）。このような庶民教導政策は談義本などの普及をもたらし、市井の儒学の確立に寄与することになった（中野 1965）。

徳川時代後期前葉に刊行された談義本『児戯笑談』（1749 年）は庶民教導家・中村三近子（1671-1741）の生前稿『理会集』が没後改題刊行されたものであり、六諭に関する教訓が述べられている（和田 2008）。この談義本の「各安生理」に関する行の中には〈啞〉に関する記述がみられる。

足事をしるを俗呼で足納といふ。四民僧俗共に我にそなはりたる職分にたんなふして外をねがはぬを勤といひて是直に学問なり。かの瘖聾を見るべし。人間とは六根の内二根不足して片輪にて不自由なる事なれども仕形にて会釈すれば何もかも理会していささか不自由なることもなし。これ仕形は瘖聾のための学問なり。

『児戯笑談』 卷之二 11 ウ 12 オ（脇山 2017: 8）

教訓「各安生理」の大意は「士農工商それぞれの職分を守り精進すること（家職の励行）」であり、中村三近子は「〈仕形〉を用いて瘖聾（＝〈啞〉）に会釈（＝解釈）すれば、〈啞〉であろうと物事を理会（＝理解）することができる」と、〈啞〉教育の可能性および動機づけに言及している。この文脈は聞こえる人が〈啞〉に音声日本語を押しつけようとはせず、〈仕形〉を用いて〈啞〉と意思疎通をはかる関係づけを示しており、聞こえる人と〈啞〉の間における非対称的な関係性を前提とせず、両者が準客体性をもつ媒介項として対等かつ双方向的な関係性を構築することをはかったものともみなし得る。

また、『三莊太夫五人嬢』における記述が〈啞〉教育における成果に限られているのに対し、『児戯笑談』における記述は「各安生理」と〈啞〉を関係づけ、徒弟

制度を通して〈唾〉を社会に取り込む意図が明確に窺われる。すなわち、『児戯笑談』における記述は、〈唾〉と儒学の関係づけが〈唾〉の職業教育の可能性（田中 2005）に動機づけられたものであることを窺わせている。

2.4 〈唾〉と孝順父母

徳川時代後期中葉に哲学者・三浦梅園（1723-1789）が編んだ孝子伝集『愉婉録』（1780 年代）は農業に従事する〈唾〉に関する伝文を載録している。

されとも此貞平もとより唾にして、母ハ年老ぬ、姉ハ手足さへかなわぬに目見へす。（中略）姉に奉養し、且母の墓のしるしをたてぬ、口物いはされとも、君の恩賜をもて母のなきしるしなせし事、大かたならず栄ともおもふ事なるへし。

『愉婉録』下「手野村貞平」（梅園学会 2015）

また、徳川時代後期中葉に幕府により刊行された孝子伝集『官刻孝義録』（1801 年）は、善行者名簿（8579 名）および伝文（759 話：906 名）を載録しており、その中に盲 16 人、病弱者 6 人、虚弱者 2 人、肢体不自由者 4 人、〈唾〉4 人がみられる（鈴木 2004）。

寛政 9 年（1797 年）孝行者忠兵衛（中略）生れしより、をしみ・しみにて物の用にもたつましきか、天性親につかへて孝あり、家業もよくつとめたりき……

『官刻孝義録』「第六 武蔵国 中」（菅野編 1999）

安永 6 年（1778 年）村上の城下庄内町にすめる三次郎ハ兄弥助と、もにものいふ事あたハされと、人にやとはれてよく母を養へり、かゝる不具の身ながらもそのはたらき他にとらさりしかハ……

『官刻孝義録』「第廿九 越後 下 佐渡」（菅野編 1999）

『愉婉録』や『官刻孝義録』における記述は〈唾〉が家業に勤しむ様子に加えて、〈唾〉が親孝行に励む様子についても述べており、「各安生理」のみならず「孝順父母」と〈唾〉の関係づけが窺われる。『児戯笑談』が刊行された徳川時代後期前葉の頃は〈唾〉が親をはじめとする家族の世話をすることは考えられないとみられていたものの、徳川時代後期中葉の頃には〈唾〉でも家族の世話ができるという認識が芽生えてきたらしいことが窺われる。ただ、「教訓子孫」と〈唾〉の関係づけは窺われず、徳川時代後期中葉の頃は〈唾〉の結婚は難しかったであろうことも窺われる。

菅野則子（1999）は「『官刻 孝義録』に載録されている障害者の伝文の効果も

多くの人々にとっては他人事にすぎなかった」と述べている。しかし、『兎戯笑談』、『愉婉録』および『官刻孝義録』にみる記述より、徳川時代前期後葉より徳川時代後期中葉にかけて、儒学の影響の下に〈哑〉に対する社会的認識が変化し、儒学と〈哑〉教育における可能性や実践が関係づけられてきたことが窺われる。日本聾哑教育言説が〈哑〉教育の可能性および実践を内包する教育言説に変容したことが、徳川時代後期中葉以降の手習塾における〈哑〉教育の普及につながっていったものとも考えられる。そのような徳川時代の日本における〈哑〉教育の可能性に関する言及および実践に西欧の影響がみられないことは瞠目に値しよう。

2.5 〈哑〉と手習塾

徳川時代後期には手習塾や私塾のような庶民教育機関が増え（梶井 2016）、幕末には相当数の〈哑〉や〈聾〉が手習塾で学ぶようになった（乙竹 1929）。明治時代中葉に刊行された『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』には、手習塾における〈哑〉教育の様子がこまかく記されている。

^{あせい}
哑生 3 人即ち男 1 人（入学の時 9 歳）女 2 人（8 歳と 9 歳）の殆ど同時に某女師匠の許へ入学を申込むや某師匠は僅かに之を許諾し…

『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』（浅岡編 1892: 25）

また、明治時代中葉の新聞には〈哑〉の集会を報じる記事がみられる。

哑の集会 浅草新畑町の山崎浪蔵（三十四年）は哑ながら学文あり、近ごろ毎土曜日の午後浅草の公園へ哑仲間三十余明を集め手真似にていろいろの談話をするが、傍人には何の事か分らぬという。

『読売新聞』1888 年（明治 21 年）6 月 17 日朝刊 3 頁 1 段

明治 11 年に日本における最初の公立盲哑教育機関として京都盲哑院が設立されたのに続き、明治 13 年には東京に訓盲院が設立され（明治 17 年訓盲哑院に改称）、両校が明治時代中葉の日本における聾哑教育を牽引したことについては論を待たない（東京聾哑学校 1935; 岡本 1997）。ただ、上記記事にみられる山崎浪蔵は明治 21 年のとき 34 歳であり、明治 17 年に訓盲哑院が哑生徒を受け入れ始めたときにはすでに 30 歳であることから、浪蔵が訓盲哑院に通学した可能性はほとんどないものと考えられる。実際、『哑生同窓会報告』⁹⁾に載録されている同窓会名簿関連記事にも浪蔵の名はみられない。すなわち、浪蔵は手習塾で〈仕形〉（＝手真似）や読み書きを身につけたものと考えられる。さらに、手習塾で学んだ〈哑〉や、手習塾に通うことすら叶わなかった〈哑〉が明治時代中葉に定期的に集会を開いていたであろうことが窺われる。徳川時代の手習塾における〈哑〉教育は徳川時代の終焉とともに断絶したのではなく、明治時代以降も続き、緩やかに明治時代以降の日本聾

唾教育言説に包摂されていたものと考えられる。

3 〈仕形〉と存在様態論

前節では徳川時代前期より明治時代までの史料にみる〈唾〉という要素が非人間的要素に還元されることなく、諸要素との相互作用を通じた翻訳を重ねていく過程を追った。本章では〈仕形〉が「手話を使う身体」といかに関係づけられてきたのか、その過程を追うことにする。

3.1 〈仕形〉と芸能

前節で紹介した『三人片輪』には下記のような記述がみられる。

へおしじゃな へ竹を叩く へして、なんぞ汝は芸能があるか へ弓いるまねをする へ又なんぞあるか へやりをつかふまねする へいろいろの事がある。もはやなひか へ茶を引まねをする へ一段重宝なものじゃ

『三人片輪』(1642年)大蔵虎明能狂言集(大塚編 2006)

上記記述より、芸能に係わる〈唾〉が示す〈仕形〉は見世物にすぎず、徳川時代前期以前は〈仕形〉と〈唾〉の関係づけに関する社会的認識が現在とは大きく異なっていたことが窺われる(黒田 2002)。

3.2 〈仕形〉と手習

『三莊太夫五人娘』(2.2 参照)には〈唾〉の家族が〈唾〉に〈仕形〉や手習を指導する行があり、〈唾〉という非人間的要素と〈唾〉の家族という人間的要素の関係づけにおける可能性として〈仕形〉が位置づけられていることが窺われる。また、上記資料からは「目出度」を意味する〈仕形〉が「目」を意味する〈仕形〉と「出る」を意味する〈仕形〉の組み合わせにより示されている例が記されており、「手習(=書記日本語)」という非人間的要素が〈唾〉と関係づけられることにより、新たな〈仕形〉を生みだしていく過程が窺われる。すなわち、〈仕形〉はさまざまな人間的要素や非人間的要素との関係性を構築し絶えざる翻訳を重ねることにより、〈唾〉の思考および意思疎通手段の「可能性」を規定してきたのであり(國分 2017: 119)、ここに〈唾〉自体の翻訳の他に、人間的要素や非人間的要素の関係性による〈仕形〉の構築、いわば〈仕形〉という存在様態の変容を窺うことができる。

3.3 〈仕形〉と儒学

『愉婉録』や『官刻孝義録』(2.3 参照)には〈仕形〉に関する記述もみられる。

あまりにまつしき程に、姉袖乞せんとおもひ立る振をミテ、涙を流し己いと

なミはたらく真似をして、抱きと、めて出さす。

『愉婉録』下「手野村貞平」（梅園学会 2015）

つねつね父母を敬ひ兄弟を親むへしとて言語はかなハさりしか、こゝろとかたちをもて人にも教へ示しけり……

『官刻孝義録』（中）「第廿九越後下佐渡」孝行者（菅野編 1999）

「いとなミはたらく真似をして」や「こゝろとかたちをもて人にも教へ示しけり」という文からは、〈仕形〉という存在様態が〈唾〉の知人や〈唾〉の家業をはじめとする人間的要素ないし非人間的要素により構成されていることが窺われる。実際、家業を身につけるために〈唾〉が親方の作業を観察し模倣および反復を通して作業を身につけていく過程において、〈仕形〉が身ぶりにとどまらず具体的な指示や抽象的概念を表出し得る機能を獲得していく過程は、〈唾〉自体の翻訳に加えて、〈仕形〉という存在様態の構築にも強く係わってきたものと考えられる（國分 2017: 119）。

3.4 〈仕形〉と一斉授業

徳川時代の手習塾における授業形態は身分制社会を前提とする個別授業を基本形態とし、手習塾に通う子供同士の学び合いはあまり期待できないものであったとされている（鈴木 2009）。しかし、実際には一斉授業をおこなう手習塾もかなりあったことが知られており（乙竹 1929）、『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』には、3人の〈唾〉に対する一斉授業の例が記されている。

それより毎日、午前若しくは午後の凡1時間を以て唾生3名を1組となし教授することとせしと其教授の方法を尋ぬるに手真似或いは実物を持し来りて之を示し先ず習ひ終りし仮名の読方（発音する能はず）を教ふるを勉めたり、已にして仮名は字体、読方共に会得するに及べり

『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』（浅岡編 1892: 26）

この記述より手習塾で複数の〈唾〉が学ぶことにより〈唾〉集団が形成され、〈仕形〉が〈唾〉集団における共通語として構築されてきたことが窺われる。手習塾における〈唾〉教育には庶民教育や出版文化の発展のような非人間的要素と〈唾〉の関係づけが新たにおこなわれ、〈唾〉の翻訳および〈仕形〉の再構築を促したものと考えられる。

明治時代以降、日本の教育機関は欧米の教育制度を導入し、一斉授業を基本的な授業形態とするようになったことが知られている（梶井 2016）。しかし、明治時代後葉以降、全国各地に盲唾学校が設立されるようになったものの、二桁以上の〈唾〉生徒を対象とする一斉授業をおこなえるような盲唾学校は都会圏に限られて

おり、大半の盲啞学校は小規模学級に留まらざるを得なかった（平田・橋本 2007）。すなわち、一般教育機関の授業形態では徳川時代と明治時代の間に相当な非連続性がみられるのに対し、〈啞〉教育の授業形態では徳川時代と明治時代の間においては連続性のほうが色濃くみられる。もっとも、そのような地域格差の下、都会圏にある盲啞学校啞生部では〈啞〉生徒集団の中で〈仕形〉が変化を重ね、現在の日本手話の雛形になったものと考えられる（末森ほか 2014）。

3.5 明治時代以降の手話観

大正時代前葉に刊行された『古川氏盲啞教育法』には、京都盲啞院の初代院長を務めた古河太四郎の手真似観が窺われる記述がみられる。

前節手勢教育の初段に述べたるが如く形象手勢は顔容、身振、手真似等により凡ての物及び其動作の形象を示すものなれば一般の人にも了解し得らるるの便あり。

『古川氏盲啞教育法』（渡辺編 1913: 113）

一方、大正時代前葉に刊行された「聾啞教育の一斑（3）」には、「手真似は聾啞の本能的所作」と「聾啞の言語としての符牒法」という文がまとめられる。

聾啞には不便、不完全なる手真似に代るべき何物もない、依然として手真似を使わねばならぬ。こうなるともう手真似は聾啞の本能的所作であります。それで私は手真似とか、符牒法とか手勢とかいうのを廃して手語と名付けたいと思うのであります。（中略）聾啞の言語としての符牒法は実に立派でもあります。

「聾啞教育の一斑（3）」（藤本 1915: 18）

古河の言説は手勢を〈啞〉と聞こえる人の関係性として位置づけるものになっており、徳川時代の教育言説に窺われる〈啞〉の社会への関係づけとの連続性が窺われるものになっている。一方、藤本の言説からは大正時代初葉には「手話は言語である」という理念、いわば「聞こえない身体」と「手話を使う身体」の関係づけに留まらず、手真似（＝〈仕形〉）が聾啞（＝〈啞〉）の自我との関係性を構築しつつあることが窺われる（木村・市田 1995; 上野・野呂 2001）。すなわち、古河の言説と藤本の言説は相当な異なりを見せており、明治時代に手真似（＝〈仕形〉）と諸要素の関係性に大きな変化が生じたことが窺われる。

4 日本聾啞教育史と非近代主義

4.1 〈啞〉の制作

徳川時代後期前葉に『児戯笑談』を記した中村三近子は、徳川時代前期以前にも存在していた〈啞〉と「各安生理」の関係づけを通して、〈啞〉の周囲に談義本、談義本の出版を支える出版制度、談義本を読む庶民の他に、徳川幕府の庶民教導政策、儒学諸派における思潮など、さまざまな要素を配置したものとみなし得る。そして、〈啞〉が儒学をはじめとする要素（＝準客体的媒介項）との関係性（＝存在様態）を構築していく過程において、〈啞〉と関係性を構築した他の媒介項が〈啞〉の特性や作用可能性に依存して翻訳される事象が増えることにより、〈啞〉の実在性が強まっていったのである。すなわち、〈啞〉の翻訳は〈啞〉教育の可能性が儒学をはじめとする要素と関係づけられる過程でもあり、〈啞〉を指導する手習塾師匠や〈啞〉を抑圧する音声言語や書記言語により、〈啞〉の新たな特性が一方的に付与されたのではなく、〈啞〉自体がさまざまな要素との関係性を構築することにより自律的に新たな〈啞〉を産出してきたのである。

実際、徳川時代後期の儒学諸派は〈啞〉をはじめとする障害者を単なる憐れみの対象としてみなすのではなく、社会の構成員として仕事を身につけることや社会に貢献することを重視する教育言説を主張するようになる（生瀬 1986）。さらに、〈啞〉は手習塾をはじめとする社会のさまざまな所に〈啞〉の集団を構築し自律的存在としての翻訳を重ねていく中、〈啞〉の言語として関係づけられた〈仕形〉という仲介項に変化し、藤本敏文（1915）の「手真似は聾啞の本能的所作」や「聾啞の言語としての符牒法」という言説として外在化したのである。

Latour（2012＝2013: 203）は「人間に無限に先行して存在する『再生産』が一貫性を保証するのに対し、不可視のものは『変容』を増幅する存在様態によって生じ、『再生産』と『変容』の交差を通して構成される存在は自律性をもつ」と述べている。いわば、非人間的要素から翻訳を通して人間的要素に還元されたかのようにみえる〈啞〉は、徳川時代後期前葉以前は存在しなかったのではなく、私たちに遠く先行する「変容」という存在様態として存在しながらも、徳川時代後期前葉以降における〈啞〉教育の可能性への言及および実践により、「再生産」と「変容」の交差を経て実在化してきたのである。このような認識に立ったとき、Latour（1984＝1988）に倣い、「中村三近子が〈啞〉を制作した」あるいは「六諭が〈啞〉を制作した」という修辞を施すこともできよう¹⁰⁾。

4.2 〈啞〉と〈仕方〉の純化と異種混淆

〈啞〉の制作により「変容」として存在していた〈啞〉は「再生産」と交差するとともに、さまざまな存在様態とも接続し自律的翻訳を重ね、〈啞〉や〈仕方〉との関係性の良し悪しを判断し、さらなる翻訳過程に反映させていったのである。

(Latour 2012 = 2013: 100, 203, 275, 488). すなわち、〈唾〉の周囲に配置された要素との関係づけにより構築された〈仕形〉は「虚構」という存在様態として、手習のような言語的要素に限らず、手習塾のような教育制度、儒学、庶民教導政策、徒弟制度のような社会制度や文化のような非言語的要素をも関係づけていくことにより〈唾〉との関係性を絶えず変えていき、〈唾〉の集団における意思疎通手段および〈唾〉の自我との一義的關係性（＝外在的仲介項）を深めていったのである。

脱近代主義では「仲介項を一般的なものとし、媒介項を例外的なものとして捉える還元主義的発想をとる」のに対し、非近代主義では「仲介項を例外的なものとし、媒介項を一般的なものとして捉える非還元主義的発想をとる」ものとみなされている（Latour 1991 = 1993: 130）。ここにおいて、「聞こえない身体」としての〈唾〉と「手話を使う身体」としての〈仕形〉の不可分的かつ一義的關係性は一時的な外在的仲介項にすぎないものとされ、「聞こえない身体」と「手話を使う身体」の本質的關係性は言語的要素や非言語的要素を内包する内在的かつ動態的な關係性として把握し直されることになる。すなわち、欧米の聾啞教育制度や聾文化論の導入により、「聞こえない身体」としての〈唾〉と「手話を使う身体」としての〈仕形〉の不可分的かつ一義的な關係性が日本聾共同体に定着したという見解は皮相的なものにすぎず、徳川時代後期における〈仕形〉の翻訳の蓄積こそが「聞こえない身体」と「手話を使う身体」の不可分的關係性の構築および外在化という「純化」につながっていったのである。

久保明教（2019: 219）は「近代を非近代と峻別する根拠とされてきた純化の水面下に膨大な翻訳と媒介の働きがあることを認めれば、額面通りの近代的世界は一度たりとも実現されなかったというノンモダニズムの視座が得られる」と論じた。実際、徳川時代後期より大正時代にかけて、〈唾〉の言語として関係づけられた〈仕形〉の範疇化（＝「純化」）により日本の聾共同体の近代化が進められたかのようにみられる。しかし、そのような近代化の水面下では〈仕形〉と書記言語や音声言語をはじめとするさまざまな要素との接触による新たな〈唾〉自身による意思疎通手段の派生や〈仕形〉の変種などが生じていたのである。ただ、〈唾〉のさまざまな意思疎通手段や日本手話のさまざまな変種は聾共同体という世界における一時的な外在的仲介項に過ぎないものであり、聾共同体という世界の中には常にさまざまな媒介項の混淆および翻訳がおこなわれている存在様態があり、それは現在も続いているのである。そのような表向きにおける〈唾〉と〈仕形〉の「純化」と、水面下における〈唾〉と〈仕形〉の「異種混淆」を包括的に捉えたとき、Latour（1991 = 1993: 11）の「We have never been modern」という記述に倣い、「日本の聾共同体はいまだかつて近代적であったことはない」という逆説的修辭を述べることもできよう。

4.3 日本聾啞教育史における欧米化の相対化

「純化」と「異種混淆」という非近代主義的視座に立ったとき、明治時代におけ

る日本聾啞教育制度の欧米化という事象もさまざまな人間的要素および非人間的要素の非近代的異種混淆という関係性の構築として相対化され得る。表層的には聾啞教育の公教育化が部分的にせよ推し進められ、聾啞教育に携わる教員の専門性の向上がはかられることにより、聾啞教育や聾共同体の「純化」が進められたかのようにみえる。しかし、聾共同体の水面下では視話教育（＝口話教育）をはじめとする「異種混淆」が起き、1.2 で述べたような「日本手話と日本語対応手話の対立」や「聾者と後期手話習得聴覚障害者の対立」のような聾共同体内部の葛藤を産み出してきたものともみなし得る。このような非近代主義に立脚することにより、徳川時代と明治時代の日本聾啞教育言説における連続性と非連続性を超克し、日本聾啞教育史の新たな地平を拓くことができるものとも考えられよう。

【注】

- 1) 本稿では通常は「江戸時代」とよばれている期間を「徳川時代」と記す（保立 2017）。また、徳川時代の二分点を 1733 年とし、前期を 1602-1733 年（132 年間）、後期を 1734-1867 年（134 年間）とする。
- 2) 20 世紀後葉以降の欧米における脱聾文化論には、*silent screen* という概念に基づく「聞こえない身体性の差異化」（Mirzoeff 1995）、*deafhood* という概念に基づく「聾文化論が包摂する戦略の本質主義の再編」（Ladd 2002）、*hearing line* という概念に基づく「聾者と聴者の関係における非対称性の可視化」（Krentz 2007）がみられる。
- 3) 徳川時代、〈聾〉は「つんぼ」、〈啞〉は「おし」と読むのが一般的であった。〈聾〉を「ろう」、〈啞〉を「あ」と音読みで読むようになるのは明治時代後葉以降のことであり、「つんぼ」や「おし」が用いられなくなるのは昭和時代後葉以降のことにすぎない。
- 4) 要素 actor/actant, 人間的要素 human actor, 非人間的要素 non-human actor, 媒介項 mediator/mediation, 準客体 quasi-object, 作用可能性 agency, 存在様態 modes of existence, 翻訳 translation, 仲介項 intermediary。
- 5) 媒介項が仲介項に変化する過程は次のように説明される。「諸アクターの関係性の全体が一つのアクターとして他のアクターと関係を結ぶことが可能になり、内部の諸アクターの働きは他のアクターに直接影響を及ぼさなくなる。こうした『ブラックボックス化』と呼ばれる契機に至って、媒介項は一時的に仲介項に変換される」（久保 2019: 65）。本稿における仲介項の具体的な例として、「聞こえない身体」と「手話を使う身体」の不可分の関係があげられる。
- 6) 存在様態論は 15 種類の存在様態を設定している（「変容」「再生産」「慣習」の他に「指示」「虚構」「技術」「組織」「法律」「政治」など）。そのうち「変容」「再生産」「慣習」を「人間に無限に先行しているが、十分に分節化されている存在様態」としてあげている（Latour 2012=2013: 285, 488）。
- 7) 「2000 年代以降のろう文化は自らの文化論を戦略的本質主義として定義することで、ろう者の独自の生活様式について記述することを可能にした。ろう文化の希求と主張自体は本質主義であっても、それは『語るための場所』を確保するためのカウンター・ナラティブであり、構築的な概念たる Deafhood と緊密な関係を結んでいる、というわけである。」（山下 2015: 178）
- 8) 近代主義に関連する各術語の英語表記については次のとおり。近代主義 modernism, 脱近代主義 post-modernism, 非近代主義 non-modernism, 汎構築主義 pan-constructivism。
- 9) 『聾生同窓会報告』は東京盲聾学校聾生同窓会の機関紙であり、明治 26 年より明治 37 年ま

で計 10 回発行された (伊藤ほか 2019)。

- 10) 「パストゥールというアクターがまずおこなっているのはアクター X の周囲に様々なアクターを配置し、それらがこうむる変化を特定していくことである。この段階では X の有様は他のアクターとの関係に大きく依存している。パストゥールが諸アクターを組織することを通じて X の性質や働きが形成されていくのであるから、確かに彼はアクター X=乳酸発酵素を制作している」(久保 2019: 115)。

【文献】

- 青山征彦, 2012, 「エージェンシー概念の再検討——人工物によるエージェンシーのデザインをめぐって」『認知科学』19(2): 164-74.
- 浅岡雄之助, 1892, 「第 6 教授の方法 聾生の教授」浅岡雄之助編『維新前東京市私立小学校教育法及維持法取調書』大日本教育会, 25-6.
- 梅園学会, 2015, 「手野村貞平」梅園学会編『三浦梅園『愉婉録』下巻』梅園学会, 35-41.
- Callon, Michel, 1986, "Some Elements of a Sociology of Translation: Domestication of the Scallops and the Fishermen of St Brieuc Bay," John Law ed., *Power, Action and Belief: A New Sociology of Knowledge?*, London: Routledge, 196-223.
- Campbell, Fiona Kumari, 2017, "Using Actor Network Theory: Case Study 'The Deaf Trade Selling the Cochlear Implant'," *Research Centre for Transformative Change: Educational & Life Transitions*, University of Dundee.
- 藤本敏文, 1915, 「聾教育の一斑(3)」『芸備教育』132: 17-20.
- , 1935, 「聾, 聾が取扱はれた狂言」藤本敏文編『聾年鑑』聾月報社, 457-8.
- 平田勝政・橋本亜沙美, 2007, 「戦前日本の聴覚障害児教育における職業教育と進路保障に関する歴史的考察——明治末～昭和戦前期の各種聾教育大会等の議論の検討を通して」『長崎大学教育学部紀要』71: 1-11.
- Horejes, Thomas P. and Christopher J. Heuer, 2013, "Egotiating Deaf Bodies and Corporeal Experiences: The Cybernetic Deaf Subject," *Societies*, 3: 170-85.
- 保立道久, 2017, 「日本史の時代名と時代区分 (再論)」, 保立道久の研究雑記: 歴史家の発想と反省, 2017 年 10 月 24 日, (2020 年 8 月 29 日取得, <http://hotatelog.cocolog-nifty.com/blog/2017/10/post-731e.html>).
- 伊藤政雄, 1998, 『歴史の中のろうあ者』近代出版.
- 伊藤政雄・雨森郁美・伊藤照美・伊藤文久・犬塚直志・末森明夫・猶原拓也・三浦富美子・岡本洋, 2019, 「『聾生同窓会報告』における手話・筆談・口話関連語彙——手話・筆談・口話語彙における訓読・音読およびサ変動詞化の動向」『手話学研究』28: 66-77.
- 伊藤葵一, 1940, 『日本聾教育秘史——言はぬ花』教育研究会.
- 梶井一暁, 2016, 「近世・近代移行期における国民教育の確立と教育観の変化——人的資本形成の前提としての近代学校」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』163: 9-19.
- 川平敏文, 2017, 「徳川吉宗の文教デザイン——『六諭衍義大意』研究ノート」『語文研究』124: 14-33.
- 木村晴美・市田泰弘, 1995, 「ろう文化宣言——言語的少数者としてのろう者」『現代思想』23(3): 354-62.
- 小玉敏彦, 2014, 「東アジア近世社会における儒教受容の諸相 (I)——江戸期の日本の場合」『千葉商大紀要』52(1): 15-31.

- 國分功一郎, 2017, 『中動態の世界——意志と責任の考古学』医学書院.
- Krentz, Christopher, 2007, *Writing Deafness: The Hearing Line in Nineteenth-Century American Literature*, Chapel Hill, CA: University of North Carolina Press.
- 久保明教, 2019, 『ブルーノ・ラトゥールの取説——アクターネットワーク論から存在様態探求へ』月曜社.
- 栗原亘, 2018, 「B. Latour のアクター・ネットワーク理論の射程と意義——「一つの共通世界の探求と構成」」『社会学年誌』59: 77-91.
- 黒田日出男, 2002, 『姿としぐさの中世史——絵図と絵巻の風景から (増補版)』平凡社.
- Ladd, Paddy, 2002, *Understanding Deaf Culture: In Search of Deafhood*, Clevedon: Multilingual Matters.
- Latour, Bruno, 1984, *Les microbes: Guerre et paix, suivi de irréductions*, Paris: Métailié. (Alan Sheridan and John Law, trans., 1988, *The Pasteurization of France*, Cambridge, MA: Harvard University Press.)
- , 1991, *Nous n'avons jamais été modernes: Essai d'anthropologie symétrique*, Paris: La Découverte. (Catherine Poter, trans., 1993, *We Have Never been Modern*, Cambridge, MA: Harvard University Press.) (川村久美子訳, 2008, 『虚構の「近代」——科学人類学は警告する』新評論.)
- , 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network Theory*, Oxford: Oxford University Press. (伊藤嘉高訳, 2019, 『社会的なものを組み直す——アクター・ネットワーク理論入門』法政大学出版局.)
- , 2012, *Enquête sur les modes d'existence: une anthropologie*, Paris: La Découverte. (Catherine Porter, trans., 2013, *An Inquiry into Modes of Existence: Anthropology of the Moderns*, Cambridge, MA: Harvard University Press.)
- Law, John, 1994, *Organizing Modernity*, Oxford: Blackwell.
- Maniglier, Patrice, 2012, "Un tournant métaphysique? : Sur Bruno Latour, *Enquête sur les Modes d'Existence*," *Critique*, 786: 916-32. (近藤和敬訳, 2016, 「形而上学的転回? ——ブルーノ・ラトゥール『存在様態探求——近代人の人類学』について」『現代思想』44(5): 98-112.)
- 松岡芳恵, 2009, 「『六論衍義大意』における経世済民の思想——「各安生理」と近世中期文学」『東洋大学大学院紀要』46: 1-15.
- 三上剛史, 2019, 「『社会』の学とアクター・ネットワーク理論——モノドロロジーとモノの理論」『追手門学院大学社会学部紀要』13: 11-29.
- Mirzoeff, Nicholas, 1995, *Silent Poetry: Deafness, Sign, and Visual Culture in Modern France*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 中野三敏, 1965, 「談義本研究 (一)——近世中期に於ける老荘思想流行の実体」『国文学研究』31: 66-81.
- 中野善達・加藤康昭, 1967, 『わが国特殊教育の成立』東峰書房.
- 生瀬克己, 1986, 「近世儒学者の障害者観覚書」『総合研究所報』12(2): 31-41.
- 生瀬克己編, 1996, 『近世障害者関係史料集成』明石書店.
- 小川和也, 2007, 「『天和の治』における將軍像と『牧民忠告諺解』——大老・堀田正俊の思想」『書物・出版と社会変容』3: 27-94.
- 岡本稲丸, 1997, 『近代盲聾教育の成立と発展——古河太四郎の生涯から』日本放送出版協会.
- 乙竹岩造, 1929, 『日本庶民教育史 (上・中・下)』目黒書店.

- 大塚光信編, 2006, 『大蔵虎明能狂言集——翻刻 註解 (上・下)』清文堂出版.
- 末森明夫・新谷嘉浩・中根伸一, 2014, 「日本手話成立伝播攷——Creoloid 性および跳躍的伝播」『歴史言語学』3: 21-52.
- 末森明夫・高橋和夫, 2016, 「聾啞概念編制史の地平——論文『日本聾啞史稿』の考察を通して」『歴史言語学』5: 39-53.
- 菅野則子, 1999, 『江戸時代の孝行者——「孝義録」の世界』吉川弘文館.
- 菅野則子編, 1999, 『官刻孝義録 (上・中・下)』東京堂出版.
- 鈴木理恵, 2004, 「江戸時代の民衆教化——『官刻孝義録』による孝行の状況分析」『長崎大学教育学部社会科学論叢』65: 19-34.
- , 2009, 「手習塾の学習環境——近世後期の絵画史料分析を通して」『教育学研究紀要』55: 12-7.
- 高橋和夫, 2018, 「『近世障害者関係資料集成』の聾啞事象」『歴史会報』56: 7-10.
- 田中萬年, 2005, 「近代化・現代化過程における Education 観の欠落史」『日本の教育史学』48: 147-52.
- 東京聾啞学校編, 1935, 『創立六十年史』東京聾啞学校.
- 津名道代, 2005, 『難聴——知られざる人間風景 (下) 日本史に探る聴覚障害者群像』文理閣.
- 上野益雄・野呂一, 2001, 「藤本敏文 (1893-1976) の手話についての考え方」『研究紀要』7: 97-118.
- 和田充弘, 2008, 「中村三近子の『学問』と楽天主義——増穂残口・佚斎楞山の談義本から『児戯笑談』へ」『文化史学』64: 73-87.
- 脇山真衣, 2017, 「『児戯笑談』解題と翻刻(1)」『文献探究』55: 38-53.
- 渡辺平之甫編, 1913, 『古川氏盲聾教育法』文部省図書局.
- 山下恵理, 2015, 「deafness 論の可能性へ——ろう文化論を聞こえない身体から考える」『年報カルチュラル・スタディーズ』3: 173-87.
- 吉野秋二, 2016, 「非人身分成立論再考」『民衆史研究』90: 17-25.

(原稿受付 2019.9.10 掲載決定 2020.8.29)

**A New Perspective on the History of Deaf Education
in Japan Based on Non-Modernism:
A Reconstrual of Deaf-Mute and Gestural Languages in the *Tokugawa* Period
by Using the Actor-Network Theory and *Modi Essendi* Theory**

SUEMORI, Akio

*National Institute of Advanced Industrial Science and Technology
(AIST), Japan*

suemori.akio@aist.go.jp

This study canvasses a new perspective on the history of deaf education in Japan based on non-modernism. Using the approaches of Actor-Network Theory and *Modi Essendi* Theory, the study visualizes the continuity and discontinuity of deaf education with the use of deaf-mute and gestural languages in the *Tokugawa* and *Meiji* periods. An analysis of a discourse related to deaf-mute and gestural languages discovered the realization process along with the translation of deaf-mute, starting from Confucianism, construction of an actor-network with different kinds of actors under the effects of Confucianism, to the instructional policy for common people or the apprentice system. The gestural language was defined as an actor-network, which re-visualizes that separable and internal relationships between deaf embodiment and deaf embodiment changed to their inseparable and external relevance. We take into cognizance the construction of the actor-network of diverse actors such as the deaf-mute, gestural language, reading, social systems, and Confucianism in the *Tokugawa* period, apart from the purification process, in which the deaf-mute and gestural languages were definitively combined, suggesting a new perspective of history of deaf education in Japan. This is to say that the westernization of deaf educational systems during the *Meiji* period in Japan does not necessarily imply the modernization of deaf education system in Japan.

Key words: history of deaf education in Japan, non-modernism, actor-network theory

(Received Sep. 10, 2019 / Accepted Aug. 29, 2020)